

社会人一年目の彼は、仕事のちょっとした案件確認も兼ねて、女上司の浅沼と宅飲みの最中だった。

「……あふう、うふう、このお酒甘くて美味しいね」

サワーに口をつけ、可愛らしいため息を吐く。

普段は大人しめな浅沼であったが、相手が彼であるためか、あるいは酔いが回っているためか、少しだけ饒舌気味であった。仕事の話から私生活の話まで、二人は着実に親密になっていった。

彼にとっても、美人で憧れの上司である浅沼と吞めるのは大変喜ばしいことだった。ころころと笑う彼女には胸をときめかせずにはいられなかった。

そんな中、和やかなその空気を裂く出来事が……。

それは彼が同僚の佐野がゴルフカートで取引先の社長を軽くはねた話をしている最中だった。当人にとっては人事ではないが、傍から聞いてこれほど面白い話ではなかった。浅沼も手を叩いて笑っていた。

「アハハハ、何それ、スゴイね。アハハハハ」

その時、お腹に力が入ってしまったのか――。

ぷうぷう!!

「ハッ!」

甲高いその異音が、浅沼の臀部から響き渡る。もし彼女が笑い続けていれば、何かのラップ音と誤魔化せたかもしれないが、浅沼は放屁音を最後に笑い声を止め、明らかに『やってしまった』という表情を作った。これでは自分がよからぬことをしたと喧伝しているようなものだった。

彼もその可愛らしい音はしっかり耳にしていた。浅沼が放屁してしまったのだ、と彼は理解した。

「……き、聞こえ、た?」

浅沼はその台詞がまた墓穴であるとも気づかず、そう訊ねた。

彼は「何がですか?」ととぼけようとも考えたが、こちらはこちらで『この人、やらかした』という少し強ばった表情を作ってしまったため、ここで嘘を吐くのは得策ではないと考え、静かに頷いた。

「う、ごめん……笑ったら、その……出ちゃって……」

顔を真っ赤にさせながら、もじもじと謝る浅沼。彼も本気で恥ずかしそうにしている彼女に何と言ってあげればいいのか分からず、気まずい空気が広がる。

と、同時に尻から放たれた屁も広がっていき――

「……あ」

浅沼は何かに気づいたような声を漏らした。

彼女の漏らした放屁は、自分の鼻元にまで漂ってきた。しかも、その臭いといったら、鼻先で直接かまされたように錯覚するほどの、濃厚なものだったのだ。

当然、浅沼の放った屁の香りは彼の鼻腔を容赦なく刺激していた。ネットリとしていて濃厚な、腐卵成分を多量に含んだような不健康そうな臭い。仕事にかまけて私生活を疎かにした結果が、その屁に如実に現れていた。

臭いに若干顔を引き攣らせる彼を見て、浅沼は激しいショックを受け、体を震わせた。

「……ご、ごめんなさい、本当にごめんなさい……おなら、臭くて……」

浅沼は目を潤ませながら、女性としてはこれ以上ないほどに哀れな謝罪をした。

ここで彼は屁のあまりの臭さに顔を引き攣らせていたことに気づき、己の浅はかさを恨みに恨む。何故、平気な顔ができなかったのか、と数秒前の自分をぶん殴ってやりたかった。

もはや室内の空気は両方の意味で最悪となっていた。気まずさとオナラの臭さがハーモニ―を奏でるように、室内を席巻していた。静かだった空気清浄機が異常な音を立てて動き出したことで、より空気は最悪になった。

こんなことで、この楽しい宅呑みをぶち壊すわけにはいかない――

錯乱した彼は、酔いも手伝ってか、元の空気を再建するための暴挙に出る。

彼は浅沼の座布団近くに思い切り顔を近づけ、タイトスカート周辺の空気を鼻で思い切り吸い込んだのだ。

「ちよつ、な、なな、何してるの、君っ！」

浅沼が驚愕するのも無理からぬ話である。鼻元に漂うガスの、それ以上の臭気を孕む尻近くの空気を嗅ぐなど、正気の沙汰ではない。自分のオナラで彼の頭がおかしくなってしまったのではないか、と浅沼は本気で心配した。

しかし、彼はいたって真剣であった。尻近くの空気を臭うことで、浅沼のオナラが臭くないということを証明し、また楽しい呑みに戻りたかった。彼はただ純粋にそれだけを考えていた。

しかし、その道はかなり陰しいようだった。

予想はしていたことではあったが、尻周りの空気は彼女のガスによって目一杯汚染されており、その臭いは目に染みるほどだった。鼻にもわあっと堂々と侵入してくる腐敗ガスに、思わず鼻を摘みたくなる。視界が黄色く染まるように感じられるほどのたまごっ屁に、脳髓をかき回される心持ちだった。

しかし、彼は浅沼の生み出した最悪のため息を臭い続けた。そして、悪臭物質のほとんどを体内に取り込んだ後に、浅沼の放屁がまったく臭くないことを伝えた。「そんな……やめてよ、もういいよ。だって……自分でも臭いと思ったんだよ、私のオナラ。もう……無理じゃなくていいから」

彼は本当にまったくこれっぽっちも臭くないということ懸命に主張したが、浅沼は悲しそうに目を伏せるばかりだった。

これではまだ足りない、とそう判断した彼は、今度は浅沼の太ももを掴んで無理矢理尻を浮かせると、彼女のタイトスカートに顔を埋めた。ならば、さらに至近距離で臭って、臭くないことを証明しようという魂胆だ。

「な、なにしてるのおっ！ ダメえッ！」

顔を朱以上に朱に染めながら、尻にへばりつく彼を引きはがそうとする浅沼であったが、彼は浅沼の腰をがっちりと掴んで離さない。ぐりぐりと臀部に顔を押しつけて、尻の割れ目の臭いを嗅いだ——そして、目をカッと見開いた。

その臭さといったらもう、鼻をもぎなくなるほどのものだった。スカートの繊維に絡みついた濃密な屁成分が、鼻腔の吸引によって彼の鼻に勢いよく流れ込む。浅沼が美人な女性であるとは思えないほどの悲惨なオナラ臭であった。プロボクサーのストレートをモロに食らったような錯覚に陥る。それでもまだ屁臭の片鱗なのだから、恐ろしい。

それでも、彼は全力でオナラの臭いを嗅ぎとった。鼻息を震わせながらも、可愛い上司のため、楽しい宅呑みのために、命を賭して闘うのだ。

「ああ、ヤダ、ヤダヤダ、もうやだあ……」

しかし、彼の予想に反して、場の空気は悪化を辿るばかりだった。自分の臀部に顔を押しつけられ、恥ずかしい臭いを嗅がれるという恥辱に、浅沼は身悶えるようにして震えた。

そんな彼女にさらなる試練が訪れる。

「ごろお……ごろごろ……！！」

「……ッ！」

動物の唸り声のような、重たい腹の音が鳴り響く。そして、感じる確かな膨満感。肛門にかかる圧力……。

最悪のタイミングで、浅沼は強烈な放屁欲求を催してしまったのだ。

このままでは、スカート越しであるにしても、彼の顔面に放屁を浴びせてしまう……。

「ちょ、ちょっと……君……」

もじもじとお尻を揺らせながら、浅沼は彼の顔を最悪の危険地帯から逃がそうとする。あまり乱暴なことをすると、勢いで放出されかねないので、なるべく静かに抵抗を見せる。

しかし、彼の頭は動かない。彼は浅沼の恥を拭うべく、放屁臭の吸引に必死だったのだ。そして、どこかハイになってる部分もあり、ムチムチとした尻にさらに顔を押しつけていた。

こうなったら直接言うしかない……。

「あ、あ、あの……」

しかし、いざ言うとなると羞恥心の強い浅沼には、恥ずかしくて放屁欲求に苛まれていることを発言できない。このまま放屁すればどうなるかは分かっているというのに……。

口をもごもごとさせている間にガスはますます蓄積され、門戸開放を願うように肛門を激しくノックする。

やがて——爆発の時が訪れる。

「あ……あつ、あつ……あああ」

背筋をピンと伸ばし、肛門をヒクヒクと痙攣させながら必死に放屁を我慢する浅沼。決壊の瀬戸際で、危うい綱渡りを続ける。

そこに彼の鼻が刺激を与える。

まるで、災厄の門をこじ開けるように、彼の鼻先は尻深くにもぐり込み——

「ああッ！ あああ——ッ！」

もはや我慢のしようなどなかった。

悲痛な声と共に、浅沼の臀部から溜まったガスが噴出する——

プビッ！ プビビビビッ~~~~~プポッブリリリ~~~~~ッッ！

先ほどの可愛らしい音色とは異なる、あまりに下劣で野太い音色だった。ガッポリとこじ開けられた肛門から、腸内で腐敗・発酵した大量のガスが噴出される。

その行き先は——当然、彼の鼻腔だった。

突然の爆音に驚く間もなく、彼は放屁の凶悪な熱気と、その激臭に身を激しく痙攣させた。当然の話だが、残り香を嗅ぐのと産地直送を味わうのでは、臭いの濃さが段違いだった。頭の中まで『腐卵』一色に染まってしまうほどの悪臭だ。

「あ、ああああ………」

ぶっぶおっ　ぶすっすうっ……ぶっ

残った屁を細切れに漏らしながら、浅沼は手で顔を覆って俯いた。後輩の顔に屁をぶちまけた恥辱に、心が裂けそうだった。人前ですらしたことがないというのに……。

間もなくして、今しがた放った放屁の香りが、浅沼の鼻元にまで漂ってきた。

「んうう、くさあい……」

思わずそう口に出してしまうほど、自分のオナラの臭いは強烈だった。お酒によって腸内ガスの発酵が促進されたせいかな、もしくは卵料理好きの弊害か、とてつもなく臭い。鼻の曲がりそうな臭いとはまさにこのことだった。

漂ってくる臭いだけでこの悪臭。それを間近で嗅いだとなれば、感じる臭さはこの比ではないだろう。

「だ、大丈夫……？」

浅沼はオナラの臭さに鼻を摘みながら、恐る恐ると彼の様子を確認した。

然る後、彼女は驚愕した。

「え……？」

彼の股間が目に見えて分かるほどにもっこりと隆起していたためだ。

いまだ処女の彼女であったが、その意味するところは理解できた。——性的興奮の他ならぬ証左であると。

彼自身も、なぜ自分が浅沼の放屁で興奮しているか分からなかった。彼女の屁は臭い。いや、もう臭いどころではない。毒ガスの域に達していると思えないほどの、獰猛なたまごっ屁であったはずだ。

にもかかわらず、彼のペニスは硬く漲りながら先端から我慢汁を漏らしており、白濁の発露を要求していた。普通ならば萎えて然るべき臭さのはずなのに、彼の反応はその真逆であったのだ。

暴発した激臭ガスが渦巻く中で、二人はしばし沈黙した。彼の鼻を鳴らす音だけが、静かに響いていた。

「うそ……だよな？」

恐る恐ると浅沼は訊ねる。

「まさか、そんな……オナラで興奮しちゃったなんて、そんなこと……」

その事実を否定したいというような口調であったが、その反面浅沼の頬には朱色が差し、胸も激しく高鳴っていた。勃起した彼のペニスにもう釘付けた。

もはやその事実を認識してしまった以上、彼に隠し通す手立てはなかった。彼は素直に認めた。浅沼の放屁に興奮し、ペニスを勃起させてしまったことを。

「そう、なんだ……本当に……」

熱い吐息を漏らしながら、浅沼は静かに唾を飲む。何かが自分の背後から忍び寄ってくる感覚がした。ひどく背德的な何かが――

まるで、浅沼の心情を読みとったかのように、彼女のお腹はぐると鳴った。次なるガスが充填された、他ならぬ合図だった。

浅沼はそっと自分の下腹部に触れた。ガスによって張っているお腹。この中に、腐敗し熟成した、恥ずかしい臭いがたつぷりと詰まっているのだ。彼の性的興奮を換気するらしい、オナラが――

きゅうつと胸が締め付けられるような感覚に陥った。同時に股間が疼きを発した。
「……ハア……ハア」

羞恥と興奮が入り乱れ、目が回ってしまいそうだった。自分のパンストに鼻を擦りつけながら屁の臭いを嗅ぎ、股間にテントを張る彼があまりに愛おしく――

浅沼は――

「……んう」

彼の髪の毛を掴むと、ぐいっと自分の尻に押しつけたのだ。

彼は突然のことに驚いた。自ら嗅いでいる以上、浅沼の放屁を堪能でき、なおかつ呼吸も苦しくない程度に彼女の尻に顔を埋めていたのだが、彼女の手と尻によって急激に圧迫されたのだ。急に呼吸ができなくなり、若干のパニックに陥った。

慌てる彼を見下しながら、浅沼は言う。興奮にその瞳は潤んでいた。

「……変態、変態だよ、君」

緊張を溶かすようにすう、と息を吸い――

「だから、オシオキ……!」

ぐい――と臀部を押しつけて、浅沼は思い切りお腹に力を入れた。

ブボォッ! フリプポポッ! ブスウ〜フリッポイ〜ッ!

空爆を想起させる爆発音と共に、暴力的なガスが彼の顔面に叩きつけられた。もはや嗅ぐまでもなく浅沼のオナラは彼の鼻腔に流入し、その脅威性を遺憾なく発揮した。鼻の粘膜が焼ける感覚と同時に、今までの放屁臭をさらに更新するような腐卵臭が彼の脳を揺るがす。腸内特有の生臭さまで入り交じっているようだった。咳き込まずにはいられない臭さに、さすがの彼ももがいた。

しかし、屁地獄から逃れることは叶わない。

浅沼が彼の顔面に座り込んでしまったためだ。

「ふ、ふふ……逃げさないよ」

大胆に臀部を押しつけ、浅沼は口角を吊り上げた。幾度とない放屁で猛烈に臭くなったお尻で思いきり後輩を踏み潰す背徳感に、ゾクゾクと身を震わせていた。尻の下で彼はもごもごもがいている。強烈な圧迫と屁の残り香にさぞ苦しんでいることだろう。

このまま放屁したらいいだろう――

千里の堤も蟻の穴から崩れる。一度決壊した理性は浅沼の性的興奮を防ぎ得ない。「私のオナラで……くさあい屁で勝手に興奮しちゃって……。もっと制裁しなくちゃ、ね」

そう言いつつ、浅沼はお腹に力を込め、お仕置きという名のご褒美をお見舞いた。

ぶぶづすうううううむづすうううううすかああああううううう

お腹に溜まったガスを、部屋でするように容赦なく放つ浅沼。しかも、すかし気味の強烈なヤツだ。

音に反して大量の熱風が彼の鼻腔を蹂躪する。すかしの臭さも加算された、猛烈なたまごっ屁に、彼の体は腰を突き上げて痙攣した。

それだけで今しがた放ったオナラが凄まじい臭さだったことが分かり、妙な達成感を覚えた。もっとも臭がらせて、辱めたいと浅沼は思った。彼女の内に潜んでいたSが、顔を出し始めたようだ。

「んフ、ふふふふ……」

清純そうな浅沼らしからぬ企むような笑みを浮かべ、彼のズボンに手をかけた。たどたどしい手つきながら、彼女はベルトを外してズボンとパンツを脱がせた。

ぼろん、と雄々しく勃起したペニスが姿を現した。

初めての生チンポに、浅沼は目を輝かせた。

「これが……チンポ……」

太くてたくましいペニスであったが、思ったより可愛いらしく、特に抵抗感はなかった。ひくひくと小刻みに震えるそれに、愛おしさすら感じた。

ふんふんと鼻を鳴らして興奮した拍子に――

ぶぶづづづううう、ブススッ！　ぶびい……

「あっ……」

オナラが漏れた。自然と。

「やだ、出ちゃった……」

すでに何発も放屁したものだから、肛門が弛緩していたのだろう。まるで流れるように、漏らしていた。予想外のうっかり放屁に、浅沼は頬を染めた。

彼の顔面に生温かいガスが広がる。故意であろうがそうでなからうが、オナラの臭いは変わらない。むしろ、予兆のない放屁である分、臭さのダメージは一入だった。パンストと下着という二枚の障壁をもともしない屁臭が、彼の鼻腔を蹂躪した。

目眩を催す硫黄臭に、彼は腰を突き上げて痙攣した。ペニスの先端から、とろりと透明な液が漏れた。

「あ、これ……」

と浅沼はペニスに顔を近づけた。そして、指先でいやらしい粘液をすくい上げると、親指と人差し指でねとおろと伸ばした。

「こ、これ、我慢汁……だよな？　すごい興奮すると、出ちゃうヤツ……」

それも、ペニスに刺激を与える前に溢れ出したのだ。未経験の浅沼であったが、彼が大変に興味していることは分かった。

こんなにクサイ、私のオナラで――

「んっ……ふ、ふうう………!」

変態な後輩があまりに愛おしく、胸の奥が絞られるような感覚に襲われ、浅沼は甘い吐息を漏らした。目つきはとろんといやらしい。

もっと……もっとイジメてやりたい――

浅沼は本能に従うままに、彼の顔を尻で激しく圧迫した。

今まではわずかに呼吸の隙間が残されていたが、今度はびっちり浅沼のお尻に埋まってしまう。パンストの繊維に口と鼻を塞がれ、一切呼吸ができない。

苦しさにパシパシと太股を叩く彼を無視し、しばらくそのまま放置し続ける。

五秒、十秒、十五秒――

次第に彼の抵抗は激しくなり、二十秒を過ぎた頃から駄々をこねる子供のように体をのたうたせる。

しかし、浅沼の巨尻からは逃れられない。彼女の臀部は堅牢な城門もかくやというほどに押しても引いてもビクともしない。浅沼は彼の抵抗など歯牙にもかけないという様子で、その時がくるのを胸を高鳴らせて待っていた。

そして、酸素の不供給によって彼の体が微かな痙攣を引き起こしたのを見計らって――

浅沼はやっとその腰を上げた。

尻圧迫からようやく解放され、まるで地下牢から地上へ脱出できたような、彼は

そんな気分を味わった。

そして、反射的に息を吸おうとする。欠乏した酸素を供給するべく、鼻と口の両方で。

——惨事は、その瞬間に起きた。

「……フンッ！」

フバビビィィィッ！ フボッ！ フピッむすっ……！！

彼の頭上に浮く尻から、くぐもったような下品な音色が響き渡り、むわぁっつとパンストや下着を物ともしない熱風が降り注いだ。

浅沼の放屁だということは言うまでもない。

そして、それを認識する前に、彼はすでに呼吸を始めていた。

放たれた濃密なガスは鼻息という新たな気流に乗って彼の鼻腔へと吸い込まれていき——

鼻を摘まずにはいられないほどの強烈な悪臭で、鼻粘膜を刺激した。

今までで最高の臭さに、彼は激しく咳き込んだ。何十秒と呼吸を止めていたため吸い込む空気の量も尋常ではなく——同時に吸い込むガスの量も今までの比ではなかった。臭い屁の塊を思う存分に嗅いでしまい、目には涙が浮かぶ。

そんな彼に追い打ちをかけるように——

「はうつ、ううっ……！」

ボスツブピィィィッ！ ぶっぴィィィッ！

尻を上げた浅沼は色っぽい声を上げながら中腰の姿勢で思いきり気張り、腹部を圧迫していたガスをこれでもかと捻り出した。肛門から放たれたガス塊はパンストと下着を容易に通過し、次々と彼の鼻腔へと吸い込まれていった。

浅沼のオナラの臭いから解放されるためには、呼吸を止めればいい。あるいは、少量ずつ吸えばいい。しかし、呼吸を制限されていた体にはまだまだ酸素が足りていないらしく、自然と呼吸を続けてしまう。放たれ続ける新鮮なガスが、凶悪な卵臭さで彼を苦しめ続けるのだ。

オナラを嗅がねば気絶してしまう。

しかし、浅沼のオナラはあんまりに臭すぎる。

だけど、それでも嗅ぎたくて——

あらゆる矛盾を孕む中で、彼は苦しみ続けた。オナラの臭いに塗れながら——そ

ブッブブブビィ！ ブッブウウウウッ………ずむずむずッ………！

すかし気味の放屁を最後に、浅沼は小さく息を吐いた。

訪れたささやかな安寧にホッと一息吐くと――

眼前に迫る黒いもの――

可愛らしくそう言って、浅沼は再び彼の顔面に座り込んだ。

~~~~~  
~~~~~す~~~~~かああ~~~~~  
~~~~~.....~~~~~

快感に善がるように目を細め、浅沼はふるふると体を震わせた。

酸欠からのガス連発によってただでさえグロッキーだったところに、それらをさ

「あ、あふふ、うふふふ……」

むわあゝゝん……と。

浅沼は大きく鼻を鳴らして自身の放ったガスを臭う。女性としては明らかに失格

レベルの強烈な臭いが彼女の脳天を貫いた。

「ああん……くっさあ」

目が回るほど、吐き気を催すほどに臭いオナラのはずだが、今の浅沼にとってはなんとも芳しい香りであった。彼女は頬を染め、目元をだらしなく垂らしながら、喜々として自分の分身を取り込んだ。

「すごい……こんなくっさいの、久しぶりかも。うふふ、こんなくさあゝいオナラ、嗅がせちゃった……♪ くさいオナラで、征服しちゃった……♪」

ぐりぐりと臀部を押しつけながら、浅沼はかつてない陶酔感を味わっていた。部下にくっさあゝいオナラを無理矢理嗅がせ。しかも、それで部下を快楽の虜にさせてしまっているなんて。非日常的な現実には、彼女の胸は激しく高鳴っていた。

もつとだ。

もつともつと……。

だからだと我慢汁を漏らすペニスを睥睨し、浅沼は彼に言う。

「ねえ、我慢してるでしょ？」

浅沼の一言に、ペニスがびくりと反応した。

「本当は、ち……ちんちん、いっぱいシコシコしたいんでしょ？ そ、それで……い、イキたいん、でしょ？」

AVで見たような台詞を不慣れながらも口にする浅沼。普段の彼女ならば決してそのようなことは言わないだろうが、この異常な空間が彼女を痴女たらしめていた。彼は同意するようにペニスをピコピコ振り、我慢汁をピッピと飛ばした。

浅沼は言う。

「なら、私の奴隷になって」

ギューウウ……と尻圧を高める浅沼。

「私の言うこと、何でも聞くの。仕事の件でも、プライベートの件でも、全部。その代わりご褒美として……私の生オナラ、嗅がせてあげる。それで、オナラ嗅いでシコシコする権利を与えてあげる。君は今日から、私のオナラ奴隷になるの。ふ、あふふ……嬉しいでしょ」

オナラ奴隷。

なんと快い響きだろうか、と彼は思う。浅沼の放屁を味わうためなら、なんだって出来る気がした。しかも、生のオナラ。嗅ぎたくてたまらない。

それに、強烈な快感を浴びるように味わい、ペニスはもう限界だった。今すぐにも射精したくてたまらない。甘美なる絶頂を経験したい。

彼は喜んでオナラ奴隷になることを志望した。浅沼の放屁のためならば、人権譲渡も厭わない。

尻の下でオナラ奴隷を志望する彼の様子に、浅沼はうっとりとした笑みを浮かべた。そして、契約完了の合図かのように……。

**ぶぽおッ！ ブッブウ~~~~ッ！ プリッポコッ！**

豪快な三発を彼に浴びせかけた。濃密なその黄色い空気を、彼はむせながらも懸命に臭った。奥手で可愛い上司のオナラは、こんなにも臭いのだ。

従順な彼に、浅沼はイタズラっ子のような可愛らしい笑みを浮かべた。

「あふふ、いい子。……それじゃあね」

と浅沼はパンストと下着を下ろし——純白モチモチの生尻を披露させた。

まさに女神を体現したような、神々しさすら感じる尻に、彼は感嘆の声を漏らした。これほど綺麗なお尻から、臭い屁が噴出されるなんて——

浅沼の肛門は毛一つイボ一つないツルツルの綺麗な肛門であった。奥手で繊細な彼女らしく、尻の奥でひっそりと窄まっているようだ。

しかし、その姿に反して臭いは強烈。オナラの残り香が彼の鼻腔と目をむわぁ……と刺激した。

「……んふ」

くすくすと笑みを漏らし、腰を少しくねらせてから、浅沼は彼の顔に尻を落としたりした。

そして、肛門の位置を微調整し、彼の鼻にぐいぐいと押し当てた。

「覚悟は、いいかな？」

ゾツとするような声色で浅沼は言った。

彼はわずかに頷いて返答する。パンスト越しであれだけ臭いオナラだ。直接嗅いだらどうなるか——恐怖と好奇心と性的興奮が彼の中で渦巻いていた。

そして、それは幕を開けた。

「はい、オナニ——タイムスタートお」

そう宣言すると共に、浅沼は腹部に力を入れた。窄まっていた肛門は背伸びをするように口を尖らせ、その先端から——

**ブブウ~~~~ぶぽおッ！びびい~~~~ブススウ~~~~ッ！**

猛烈な毒ガスを噴射させた。

放たれたオナラは問答無用で彼の鼻腔に侵入を遂げ、フィルターによって濾過されていない、本当の産地直送の一撃を炸裂させた。

それは想像以上の臭さだった。

今になって、生地というものの凄さを思い知る。障壁のおかげである程度緩和されていた臭いの、その本性が牙を剥いた。卵臭の強烈に詰まった風船が、目の前で爆発したようだ。咳き込まずにはいられない臭さに、彼は悶え苦しんだ。

苦しいはず。なのに、自然とペニスに手が伸びる。

彼はオナニーをしてしまう。臭すぎる屁を臭いながら。

「……あは♪」

我慢汁を全体に広げながら自慰行為に励む彼に、ますますと愛おしさを感じる浅沼。帯びた愛液は彼の顔に滴り落ちる。

浅沼はさらに深く深く腰を落とし、尻たぶを両手で鷺掴んで広げて肛門を奥から覗かせ、高い彼の鼻に擦りつける。そして、ぬ。ふう……と尻の穴で鼻をゆつくりと飲み込んでいく。

生温かい粘膜に支配されていく感覚。同時に、腸内の臭いがむおおお……と流れ込んでくる。

恒常的なオナラの臭い。嗅いでも嗅いでも新鮮なガスの臭いが鼻粘膜を刺激して止まない。

「ハア……ハア……!」

腰を上下に動かし、フェラチオするように肛門で鼻を舐める浅沼。肛門から発せられる刺激に、たまらない愉悦を覚える。

腹の蠕動音が聞こえる。深く腰を下ろして、腹に力を込める。

「……んうッ!」

ぶむうううううッ! ぶぽおおッ! プッスウウウウ……!!

籠もったような音色と共に大量のガスが鼻腔に注ぎ込まれていく。鼻を通り抜けるガスは猛烈な卵臭さを残しながら、口の方へと抜けていく。生温かい強烈な屁を鼻と口の両方で味あわされるのだ。

肺まですっかりオナラ漬けにされる感覚に、ペニスの扱くスピードはますますと加速する。クチュクチュクチュクチュ——と粘着質な音色が響き渡る。

「ハアッ、ハアッ、ハアッ!」

息を切らしながら腰を上下させ、肛門で鼻を咀嚼する浅沼。腸液で滑りの良くなった肛門は、ヌルッ、ヌプッと彼の鼻を舐る。そして、放屁欲求に苛まれるとすぐに、

「……んうッ!」

ブピピッ！　ぶもつぶぶスうッ！　むわぁ~~~~~……！！

鼻をくわえ込んだまま強烈な一発をかます。夥しい猛烈な汚臭が、ますますと鼻腔を焼け野原にさせていく。あまりの臭さに涙が止まらない。

だが、チンポピストンは止められない。まるで苦しさに比例するかのように、ペニスを扱う腕はより強く、より速く動く。

屁に浅ましく興奮する彼に、浅沼はますますヒートアップする。

「ほら、ほら、もっと嗅いでいいんだよ、私のくさぁいオナラ。へ、変態だもんね、汚くて、く、くっさぁい女の子ガ스에興奮しちゃうんだもんね。最低ね、最低、最低。オナラ嗅がされてこんな風にお、お、オナニーしちゃうんだもんね。あふ、ふ、ふふふふ……ほ、ほら、追加のふうくだよ」

ブピッ　ブピリリッ！　ぶすっむぶぶう~~~~~ッ！

「あんっ、すごい、すごい出ちゃった、オナラ。お、お尻……ケツ穴から、いっぱあい。んふふふふ。あ、くっさぁい、オナラくさっ。もお、お、オナラ好きなら、残さず全部嗅がなくちゃダメでしょ。何度言ったら分かるのかしら、き、君ってば、あふふふ。ホントにダメダメな部下なんだから。ほ、ほら、オナラを嗅ぐことくらいしか能がない消臭器が、オナラも消臭できないなんて、ダメでしょ？　はぁい嗅いで嗅いでえ」

バススッ！　ぶぶつぶぶう~~~~~ッ！　ぶりりっむすう

「アレ？　アレ？　あふふふ、なんだかちよつとぐったりしてる？　ダメだよお、もつといっぱいオナラ出ちゃうんだから。私のお尻見ただけで、ち、チンポ勃っちゃうくらい、鼻の奥までエッチなオナラを染み着かせるの。もう、私のオナラ以外じゃ、興奮しないように……こうやって」

ブリリッブフ~~~~~ッ！

「ハア、ハア、もつと出るよ、オナラ……オナラ、もつと、ほら、オナラあ」

ブピピ~~~~~ぶぶう~~~~~ッ！　ブリッブフ~~~~~ッ！

愉悦の表情を浮かべながら彼を詰り、催して即、屁を放つ浅沼。とつくのとうに、肺の空気全ては浅沼のオナラと入れ替わってしまっていた。それほどの量のオナラを、彼は嗅がされていたのだ。

意識は朦朧とし、それでも自然と鼻が動く。快樂のみを求めて屁の臭いをオカズに手淫を続け、頬を弛緩させながら屁の臭いを楽しむのだ。

もうペニスは限界だった。グツグツと煮えたぎった精液が今まさに鈴口から激しい勢いで噴射されようとしていた。

その様子は生の射精を目の当たりにしたことのない浅沼でも分かった。

「あ、出る？ 出ちやいそう？ う、うふふ、出ちやう、出ちやうのね。し、白いオシッコ……」

彼が服従の証を示すその瞬間が近づいていることを悟り、浅沼は胸を激しく高鳴らせた。

それなら……。

「はうつ、んんうう……」

今また催した屁を噴出させぬように我慢する浅沼。どうやら、屁を我慢することによってガスを圧縮し、濃度の高まったオナラを一気に浴びせ、最低に無様な射精を経験させる魂胆らしい。

性的興奮に応じて催すガスを、無理矢理に堰き止め、圧縮する。腹部に生じた強烈な膨満感に幾度も肛門が弛みそうになるが、浅沼はそれでも屁を我慢し続ける。

「ま、まだよお、まだダメよ」

そう言っ、苦悶の表情を浮かべる浅沼。

「今から一番……一番くっさあゝゝいの嗅がせてあげるからあ。それまで射精しちや、ダメだから……ね？」

そう言われては我慢するしかない。

彼は浅沼のオナラ奴隷なのだから。

「でも、シコシコ、やめちゃダメだよ？ シコシコしながら、我慢して……？」

無茶な要求だったが、耐え抜くしかなかった。彼は手淫を続けながら懸命に射精を我慢する。

しかし、容赦なく鼻腔を汚染する浅沼のオナラが、彼の淫欲をどうしよもなくそる。残り香だけで、危うく絶頂に至りかけるのだ。彼女の屁を常時臭いながら、ペニスを抜き、それでも射精を我慢するなど、どれだけ固い意志があろうと至難の業というものだ。

早く……早く、嗅がせてくれ。





まるで永久に続くかのように思われる――  
すかしっ屁であった。

窄まった肛門から静かに、それでも凄まじい勢いで噴射されるすかしのオナラ。  
ねえっとりと生温かいガス塊が鼻腔の中へと注入されていった。

濃密に圧縮されたすかしっ屁。

臭くないはずがなかった。

彼は鼻に染みるように感じられるほどの卵臭さにその身を魚のように跳ね返らせながら、ゴシユゴシユゴシユゴシユ――とペニスを激しく扱き上げた。熱い滾りがゴポゴポと煮立ちながら、尿道を激しく駆け上ってくる。臭い、臭い、臭い臭い臭い臭い――しかし、彼にとってそれが素晴らしかった。

屁はまだまだ続く。浅沼のタンクに貯蔵されたガス量はこの程度で治まりのつくものではなかった。

ブッシユウウウウウ~~~~ぶすすす~~~~ぶ~~~~む~~~~しゅう  
う~~~~む~~~~う~~~~~~~~

「あ、ああ……お、おほおッ……ん、ひィ……ッ！」

下品なアへ顔を晒しながら、浅沼は栓を抜かしたビンのように、溜まったガスを本能のままに垂れ流している。別にわざとすかしっ屁にしているわけではない。自然とすかしてしまっているのだ。

黄色く着色されているよう伺える、濃密たまごっ屁。

すでに彼の鼻腔内で収まる量ではなく、浅沼の激臭ガスは空气中に散布され、入った者を即倒させるほどの威力を誇っていた。

臭すぎるオナラの臭い。ストレスや不摂生の賜たる、恥辱ガス。愛すべき美人上司の屁の香り……。

濃厚屁を全身に溶かし、彼は快樂の海に浸った。

無尽蔵に溢れるすかしっ屁は彼を絶頂に至らしめるには十分過ぎるほどのものだ。

腸内でたっぷりと圧縮されたオナラを存分に享受しながら、腰を突き上げ、ペニスを一気に扱き上げる。その昂ぶりを頂点にまで。

「ほら……イッてえ、イッていいの……よお？」

チンポを激しく扱き上げる彼を見て、濃密すかしっ屁を放ちながら浅沼は詰る。  
「私の、私のオナラでえ、ち、チンポ……チンポイくのお、ほら、見せてよ、オナ

ラ奴隷の、証明。激くっさあゝいオナラでえ、おチンチン汁ぶちまけちゃ……ってえ」

ブジュウウウ~~~~むっすかああああああ~~~~……ッ！

絞り出される熱い熱いすかしっ屁。

蠱惑的な腐卵臭、猛烈に臭うその屁に彼の意識は溶かされていく。

間断のないペニスの快楽を褥に、彼はいいいよ抗いようもなく——果てた。

ド「チン、チン、びゅるるるる~~~~びゅるるるる~~~~」

激しい手淫に伴うように、噴水のような白濁が力強く噴き上げた。足を激しく悶えさせながら、脳天を貫く快感に頭の中を白に染めさせた。

抗えぬ生理欲求のまま白濁を吐き出すペニスを前に、浅沼は頬を綻ばせた。

「あ、あああ、す、すごい、ホントに……出てる……」

生で見る初めての射精。断続的に噴射されるヨーグルトが飛んでは散り飛んでは散り。見る見る内に白濁が床を汚していく。

「ほ、ホントに……私の、で、こんな……ああああ」

歓喜に呼応するように浅沼の尻も祝砲を上げた。

ブジュウ~~~~フリッフリッブジュウ~~~~ッ~~~~ッ~~~~

音有りの屁を下品にまき散らす。すかし屁よりには及ばないが、それでもほとんど遜色ない臭さを誇るオナラ。

猛烈な腐臭の温風を堪能しながら——

びゅるるるる~~~~びゅるるるる~~~~~~~~ッ！

最後に腰を大きく突き上げ、溜まりに溜まった精液をまとめて四散させた。脳が溶解するのではないかと思われるほどの強烈な快感に、彼の意識はいいいよ消失寸前に陥った。

「はあ……はあ……はあああん……」

腰をビクビクと痙攣させる浅沼。どうやら彼女もまた絶頂に至ったようである。

(ふ、ふふ……ふふ……す、すごい……)

胸の内で浅沼は思う。

(お、オナラで男騷るの……最高お……♪)

完全にSつ気を萌芽させたようだ。しかも、放屁による支配という、極めてマニアックな性癖だ。

浅沼は立ち上がり、その豊満な尻を見せつけながら彼を見下ろした。

彼は朦朧とする意識の中、  
 かろうじて女神を見上げた。

「ふふ、あふふ……」

艶然と笑う彼女は、あまりに美しくて――

「イっちゃったね、変態くん」

飛び散った精液に目をやりながら、浅沼は言う。

「イっちゃったってことは、どういうことか……分かるよね？」

よく分かる。

「あなたはもう、私のオナラ奴隷よ。私のオナラのためになんだって言うこと聞いちゃう、奴隷になるの。そうよね？」

そうだ。

「あふふ、素直な良い子。……」褒美あげなくちやね」

ゆつくりと腰を下ろして――

肛門を鼻に押し当てた。

「お・や・す・み」

.....

間抜けな音の浅沼の放屁。

愛おしい熱、風圧、強烈な臭さに浸りながら――

彼はいよいよ意識を失っていった。

「……ふふふ、ふふふ」

浅沼の艶やかな笑い声を聞きながら。